

かのうどもみひさし

2000年、ハノーバー万博でのワークショップより和紙制作のユニットとして活動開始。加納どもみ、ひさし2人の名前からユニット名「かのうどもみひさし」とする。以後、公募展を離れ、個展などで活動する。2005年、愛知万博ドイツ・フランス共同館にて和紙漉きワークショップ。また、和紙漉きワークショップグループ“ハノーバー・ユニット”を主宰。和紙「伝統と現在」会代表。2003年以降、パリ、上海、ボルドー、ミシガンなど海外でも個展、ワークショップを開催。「半流し漉き」という技法で、自分たちが生きているこの時代の日常に用いられる和紙の在り方を模索中。

◎加納 登茂美(かのうどもみ)

日展入選7回、日本現代工芸美術展入選8回、現代工芸賞受賞

◎加納 恒(かのうひさし)

日本伝統工芸展、東海伝統工芸展、伝統工芸第七部会展、入選

ワークショップ「ボトルキャップペーパー」

ペットボトルのキャップを和紙に漉き込んで、メモリアルペーパーを作ります。



11月2日(日) 午前の部①10:30～12:00 午後の部②13:30～15:00
会場=小原和紙のふるさと 和紙どうし工房
参加費=1,500円
定員=各回8名(先着順)
対象=どなたでも(小学生以下は保護者同伴)
申込=午前または午後のご希望の部、氏名、参加希望人数、電話番号を記載のうえ、メールにてお申し込みください。
メールアドレス=washinofurusato@city.toyota.aichi.jp
受付開始=10月18日(土)10:00～

Bottle-Cap-Paper ボトル・キャップ・ペーパー

幼いころの私を撮った一枚の古い写真が今手元にあります。柱の陰に隠れて恥ずかしそうにしている私がいいます。その和紙のふる里、小原村から私の人生は始まりました。今は、山里の日常生活もとても便利になり、たとえばペットボトルのキャップを開ければほとんど全ての飲み物を、口にすることができるようになりました。そんな時にふと思うのです。このかわいいキャップは、これから何処にいくのだろうか・・・と。あの幼いころの私は、今どこに行っただろうか・・・と。心の中で、不思議な疑問が重なり合うのです。長い時間がたち、でもそれはあつという間でもあったので、夢のようでもあり、もちろん超えていかねばならぬ現実のことでもあります。

かのうどもみひさし

遠山奈津子演舞 風の余韻、光の気配

①11月15日(土)14:00～、②11月30日(日)14:00～
会場=小原和紙のふるさと 小原和紙美術館 第1展示室
参加費=無料(ただし、当日の観覧券提示が必要です)

薄様の和紙が風をまどい空間をたゆたう様は、

それだけで見ているものの心に静けさをもたらすように感じます。

風が吹き、止み、そしてまた風が吹く。

その自然の律動と共に動く和紙の息吹は、

動き始める前の気配、

収まった後の余韻すらも心に響いてくるように感じます。

その和紙に寄り添う姿が舞となりますように。

豊田市小原和紙のふるさと 小原和紙美術館

〒470-0562 豊田市永太郎町洞216-1 TEL 0565-65-2151

<https://www.washinofurusato.jp>

交通案内

どよたおいでんバス:豊田市駅から上仁木行きで約60分、和紙のふるさとバス停下車

車:猿投グリーンロード中山I.C.から国道419号線を北へ約15km

小原和紙のふるさと
Webサイトはこちらから



観覧料 一般200円

(有料入館者20名以上の団体は1人150円)

※豊田市内在住の18歳以下と70歳以上、豊田市内在住または豊田市内の高校に通学する生徒、身体障がい者手帳等の交付を受けている方は無料。(要証明書)

※他の減免については豊田市小原和紙のふるさとの

ホームページをご確認ください。



令和7年度
文化庁
文化芸術創造拠点形成事業



掌

たなごころ

の

かのうどもみひさし

記

憶

幻視の風景



2025 9.30 |火|－12.7 |日|

祝日と11月17日を除く月曜日は休館 開館時間 9:00～17:00(入館は16:30まで)

観覧料 一般200円(有料入館者20名以上の団体は1人150円)

豊田市小原和紙のふるさと 小原和紙美術館

〒470-0562 豊田市永太郎町洞216-1 TEL 0565-65-2151

<https://www.washinofurusato.jp>

主催 豊田市小原和紙のふるさと

交通案内

どよたおいでんバス:豊田市駅から上仁木行きで約60分、和紙のふるさとバス停下車
車:猿投グリーンロード中山I.C.から国道419号線を北へ約15km

小原和紙のふるさと
Webサイトはこちらから



長い旅の終わりに

～天瓜の花の咲く頃～

長い旅の終わりに

風化した古期花崗岩は
美しい色を含みながら
静かに堆積してゆくのです。

何千万年もの後に
ホモサピエンスという名の
不思議な生き物が
土、砂、礫として
はじめて掌にそっと
のせたのだそうです。

長い旅の終わりに
浜砂の中で夢見る砂岩は
陽のよくあたる護岸の上で
不思議な形に割れていきます。

ずっとそうしてきたのだと、
浜の砂は語ってくれたことです
ホモサピエンスが地上に現れる
ずっと以前からの事なのだ。

襖 (2020年 永澤寺)



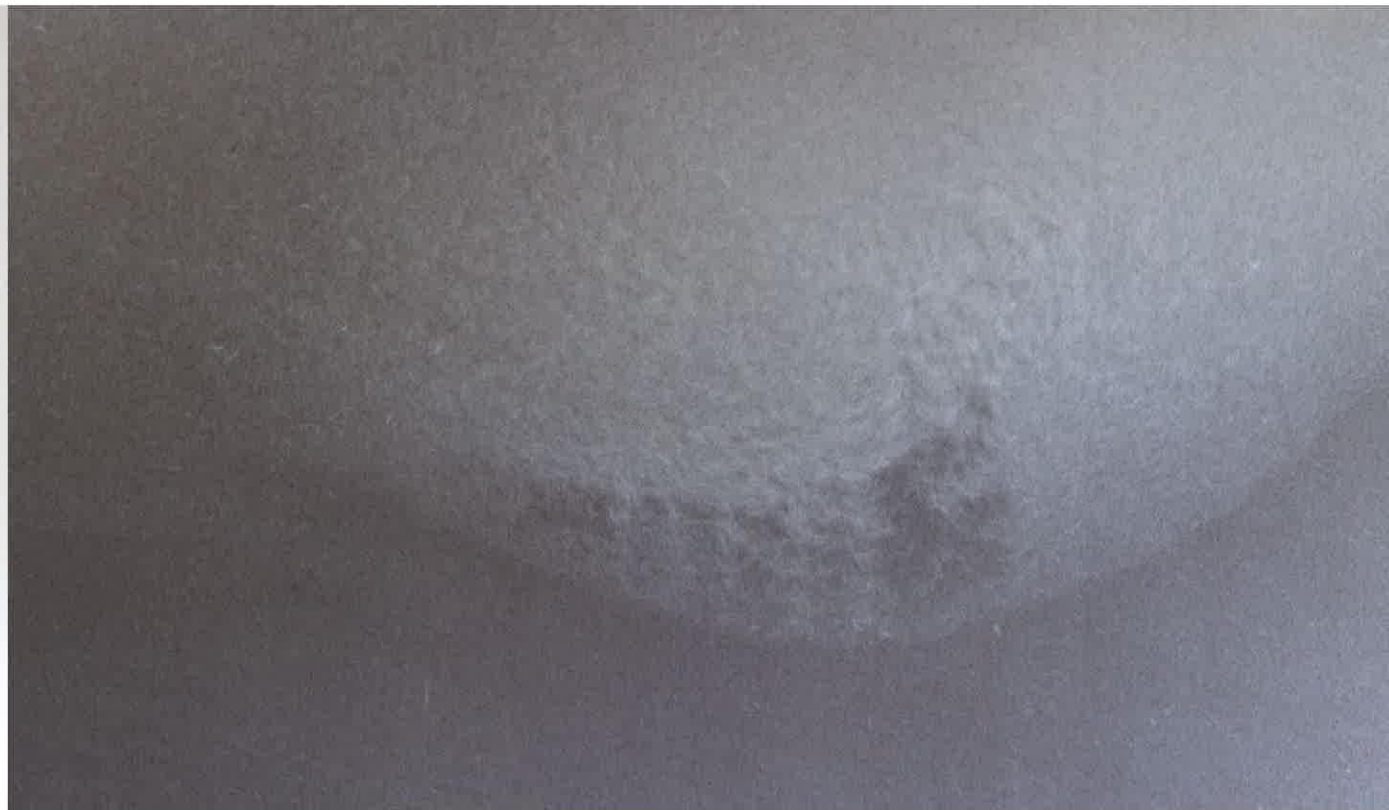
豊田小原和紙工芸は総合芸術家藤井達吉が小原の伝統的な手漉き和紙「三河森下紙」に植物や土（鉱物）など地元の自然素材を融合し、彩色を施したことに始まります。その後、芸術表現の多様化が進む中で、染料による鮮やかな色彩の作品が主流となり、次第に土を使う機会は減少し、ほぼ使用されなくなりました。かつて藤井は、自然を学び自然に教えられ、そこから創造するのが芸術であると教えています。かのうどもみひさは、1998年から土入り作品の制作を始めていますが、それは過去の技法を踏襲したものではなく、自然の礎となる大地を素材にして土でなければ表現できない独自の作品を生み出しました。土入り以外の作品には、植物などの自然染料が多く使われています。これらの作品はまさに作家と自然が一体となり、互いの包容力が感じられ、自然に包み込まれているようです。

豊田市小原和紙のふるさと

掌 の

かのうどもみひさし

記憶



幻視の風景 (2024年)



かのうどもみひさしの仕事

二人は自然を愛し、大切に育み、畏敬を持って日々暮らしている。木々の命、土や水の豊かさを和紙に漉き込む。その一点に根差した仕事だからこそ生まれる作品は美しい。身体の内底から湧き出る美意識が色や文様を決める。その勘所を養うのは日々の魂の訓練の賜物なのだろう。確かな手仕事に宿るメッセージは、優しさを伴う力強さで私に伝わる。

ギャラリーサンセリテ 野尻真理子

壁一杯の雑色紙 (2017年 ギャラリーサンセリテ)

名古屋を中心に、南北に延びる熱田大地と呼ばれる南端に私共「紙の温度」はございます。かのうどもみひさし氏にはそんな熱田ゆかりの熱田層の土や小原赤土はじめ、他県の珍しい土を漉き込んだ土入り和紙を制作し店内の一室の壁前面に貼ってもらいました。それぞれの土の温かみのある自然の色が、紙のぬくもりを伝えたいという紙の温度の想いにもつながり、とても素敵な雰囲気を皆様には味わっていただいております。紙の温度株式会社社長 花岡成治



小原赤土入りの和紙貼混ぜ技法の壁面 (2012年 紙の温度)